

広大スタンダード 6000 語彙リスト (HiroTan) の開発と活用

榎 田 一 路
森 田 光 宏
阪 上 辰 也
鬼 田 崇 作

広島大学外国語教育研究センター

1. はじめに

広島大学外国語教育研究センター（以下「センター」）では、オリジナルの語彙リスト「広大スタンダード 6000 語彙リスト (HiroTan)」を開発し、平成 23 年度より教養教育の英語科目「コミュニケーション基礎 I・II」の教材として運用を開始した。同リストは平成 29 年度現在も改訂を重ねつつ、継続的に運用されている。その開発は過去センターに所属していた、そして現在センターに所属している英語担当教員全員による成果であるが、本稿では、「コミュニケーション基礎 I・II」を担当している著者が代表となり、同リストの開発の経緯、および本学におけるこれまでの具体的な活用方法についてまとめるとともに、今後の展開について記す。

2. 「広大スタンダード6000語彙リスト」開発の背景

広島大学では、平成 23 年度より一部の主専攻プログラムにおいて、学生の英語力向上を図る目的で、英語の要修得単位がそれまでの 6 単位から 8 単位に変更された。当時この措置は、本学の 1 年生の半数にあたる 8 学部、約 1,000 名を対象とするものであった。この英語 8 単位化の概要を、図 1 に示す¹⁾。

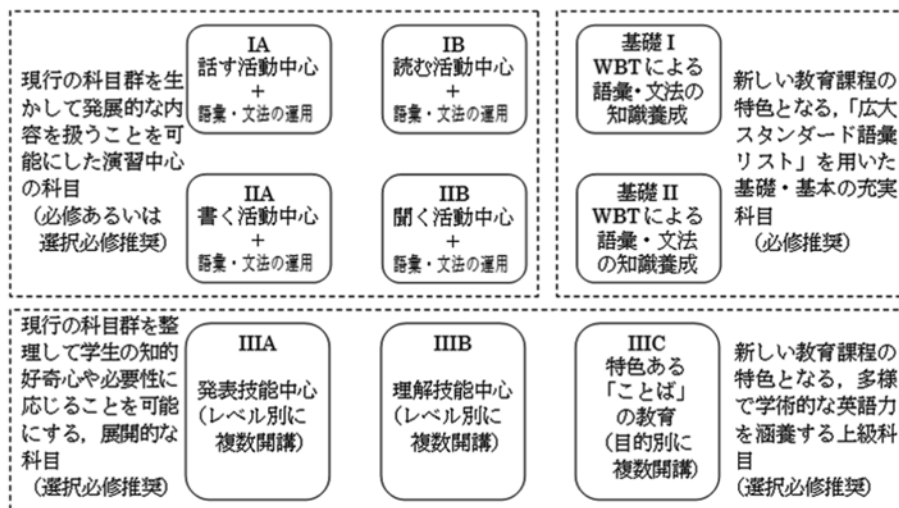


図1 広島大学英語8単位化

既設科目のうち、1年生の履修科目は「コミュニケーション IA」（スピーキング中心）「コミュニケーション IB」（リーディング中心）「コミュニケーション IIA」（ライティング中心）「コミュニケーション IIB」（リスニング中心）の4科目である。英語8単位化クラスにおいては、これらに加え、自学自習形式のオンライン教材による語彙・文法の学習を中心とした新規授業科目として「コミュニケーション基礎 I・II」が設けられた。この新規科目を効率的に運用するため、以下のような方針が取られた。

- ・既存科目のうち受容技能を扱う「コミュニケーション IB・IIB」は、「コミュニケーション基礎 I・II」と連動させつつ、同一の教科書・進度・テスト・成績評価に基づき実施する。
- ・これらの対象授業は、センター所属教員が担当する。
- ・センター内に「英語力向上ワーキンググループ」を設け、当該科目の担当教員による企画・運用・点検を行う。

英語8単位化にかかるこれらの実践は、経済学部および生物生産学部の1年生を対象として平成17年度から平成22年度まで実施されていた、キャンパス・ユビキタス・プロジェクト（以下「CUP」）にかかる英語教育実践の経験と成果の延長線上でなされることとなった（榎田・磯田・前田・田頭，2006; 2007; 2008; 2009）。CUP対象の「コミュニケーション IB・IIB」では、CALL教室およびWBT（Web-Based Training）教材が活用され、同一の教科書・進度・テスト・成績評価に基づく授業実践がなされた。また、1年次前期開講の「コミュニケーション IB」および後期開講の「コミュニケーション IIB」が、同一の教員集団によって担当された。これにより、より長期的なスパンに基づく学生の英語力の測定、および学生の英語力向上に資する授業計画の立案が可能となった。

CUPにかかる授業実践では、教科書に登場する重要語から語彙リストが作成され、WBT教材を利用した毎週100語の事前学習が課された。毎回の授業で実施される単語テストのほか、毎月小テストが実施され、教科書と連動した語彙学習および頻繁な復習の機会が設けられた。その成果は、各学期の最初と最後に実施される「英語実力診断テスト」により可視化され、学生自身が英語の知識の向上を実感できる仕掛けが作られた。さらに夏休み中を利用した復習の課題により、年間を通じて継続的に学習が促された。

英語8単位化にかかる授業実践においても、これらのCUPでの実践内容が活用されることとなった。CUP対象の「コミュニケーション IB・IIB」において、オンライン学習は同科目の一部であったのに対し、英語8単位化に伴う「コミュニケーション基礎 I・II」は独立した授業科目となった。「コミュニケーション基礎 I・II」の教材はすべてオンラインで提供され、自学自習のみによる学修を要するため、これを大規模に展開するにあたり、ドロップアウトを防止するための方策が求められた。そこで、対面授業である「コミュニケーション IB・IIB」に、上述のCUPにおける語彙学習の仕組み（単語テスト、小テスト、英語実力診断テスト）を導入することで、オンライン学習の継続的な取り組みを支援することとした。一方、「コミュニケーション基礎 I・II」においては、それ自体で単位修得に必要な学習量を備えたオンライン教材の整備が必要となった。

このような背景に基づき、「コミュニケーション基礎 I・II」の教材として「広大スタンダード6000語彙リスト」が開発されることとなった。

3. 「広大スタンダード6000語彙リスト」の開発

「広大スタンダード6000語彙リスト」の正式運用は平成23年度となるが、これに先立ち、平成22年度にCUP対象「コミュニケーション I・II」にて試験運用された。同リストの開発は、

試験運用の前年度となる平成 21 年度に着手された。

3.1 「広大スタンダード6000語彙リスト」の概要

本リストでは、日常的・一般的コミュニケーションの場面やアカデミックな場面での重要語彙 6,000 語が選定されている。この語数は、「コミュニケーション基礎 I・II」の単位認定に必要な学修を担保しつつ、十分に自学自習が可能な分量と判断された。「コミュニケーション基礎 I・II」の 2 セメスター（計 30 週）を通じ、学生は毎週 200 語ずつの語彙を学習することが求められているが、高等学校までの既習語や、派生語なども含まれているため、毎週の自学自習が十分に可能である。同じワードファミリーに属する語に繰り返し接触することにより、より効果的な語彙定着が期待される。

本リストは、標準レベル 4,000 語、発展レベル 2,000 語の、計 2 つのレベルで構成される。標準レベルの語の中には、「コミュニケーション IB・IIB」で使用する教科書の重要語も含まれており、毎週 200 語のペースで学習することで、自学自習により習得された語が、対面授業でも登場する仕組みとなっている。

本語彙リストは、いわゆる List learning (Webb & Nation, 2017) による受容語彙の増強に焦点が置かれている。この 6,000 語について、英文テキストの中で接触した時に意味が分かることで、英文の理解をより効率化することを目的としている。このため、各語の日本語の意味は、1 単語につき 1 つの意味を原則としている。中には複数の訳語をつけざるを得ないものもあるが、その場合も List learning に支障のない量に抑えられている。このほか、各語にオリジナルの例文とその日本語訳も加えられ、これらを掲載した冊子体が、オンライン教材とともに提供されている。

3.2 リスト開発の手順

本リストの開発にあたり参照した語彙リストは、Coxhead (2000) による「Academic Word List」(AWL, 570 語)、相澤ら (2005) による「大学英語教育学会基本語リスト」(JACET8000, 8,000 語)、および水本 (2004) による TOEIC^(R) テスト頻出語彙リストの一部 (2,526 語) である。さらに英語 8 単位化対象クラス「コミュニケーション IB・IIB」の教科書『Power-Up Practice for the TOEIC^(R) Test』(榎田・平本・Fraser, 2008) より抽出された、オリジナルの重要語彙リスト (1,400 語) も加えられた。定評のある語彙リストを含め、複数のリストを参照することにより、日常的・一般的コミュニケーションの場面とアカデミックな場面で必要な語彙を網羅できるようにした。これら 4 種類のリストに含まれる計 12,500 語 (重複含む) を候補としてリストアップし、個々の単語につき、センター所属の英語教員 4 名による評定の作業が行われた。各教員の直観に基づき、本学の 1 年生にとって簡単すぎると思われる語は 5、逆に難解すぎる語は 1、その中間の語はその程度に応じて 5 段階の評定が行われた。これらの結果を集計した結果、平均値が 1.75~4.25 の範囲に属する語群より、リストに掲載する単語が選定された。平成 21 年度の試験運用では 4,000 語、平成 22 年度の本格運用では 6,000 語が選定され、後者においては難易度の高い 2,000 語を発展、残りの 4,000 語を標準とするレベル分けがなされた。以上のように、語の選定においては、センターで実際に英語教育を担当している教員の主観に基づく評定をまず行い、次にそれを数値化して集計することで、経験と客観のバランスを取ることを目指した。

3.3 教材の整備

選定された見出し語は、それぞれ日本語の意味、例文、およびその日本語訳が加えられた。例文は、平成 24 年度から標準レベル 4,000 語に付加され、その後平成 28 年度には発展レベル 2,000 語にも付けられた。6,000 語の全単語に例文と日本語訳を付けるという膨大な作業は、「英語力向上 WG」を中心に、英語ネイティブスピーカーの教員を含むセンターの英語教員全員の協力により行われた。これらは 2 冊の冊子 (Book 1, 2) にまとめられ、「コミュニケーション基礎 I・II」の受講者に提供された (図 2)。これらの冊子は、現在は教科書として広島大学生協を通じて、各 670 円で販売されている²⁾。

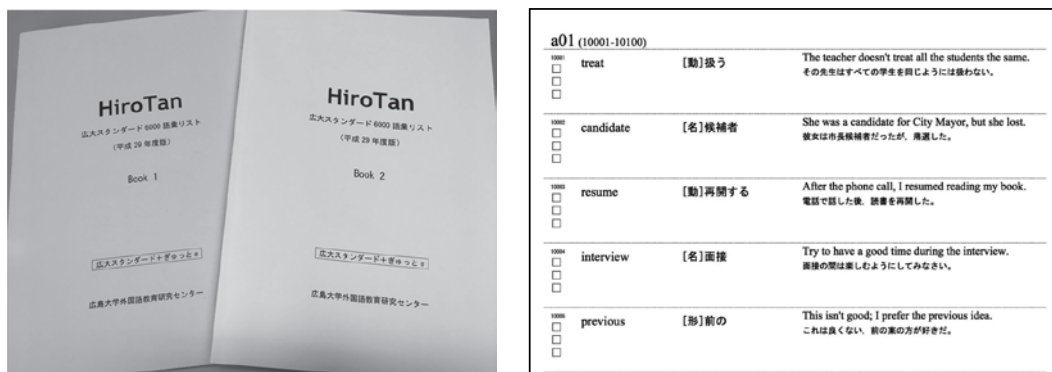


図 2 冊子体の表紙と内容のサンプル (平成29年度版)

語彙知識養成用の WBT 教材システムとして「オンライン単語学習」が利用された。同システムは、センターの前身である情報メディア教育研究センター (外国語教育研究系) の助成を受けて平成 13 年度に開発された、オンライン自学自習型語彙学習教材システム (VP システム) をベースにしている (榎田, 2017)。広島大学オリジナルの WBT システムである VP システムは、センター開講のオンライン授業科目において運用実績があり、先述の CUP にかかる教育実践でも用いられていたことから「コミュニケーション基礎 I・II」でも「オンライン単語学習」として引き続き採用された。「オンライン単語学習」では、膨大な量の単語を、スモールステップで、繰り返し学習できるための仕掛けがなされている。100 語分の学習を 1 チャプターとし、1 チャプターは 16 ユニットに分かれている。最初の 15 ユニットはそれぞれ学習モードとテストモードで構成される (図 3)。学習モードでは、そのユニットで学習する単語が表示され、意味を確認したり、発音を聞くことができる。テストモードでは、単語と意味のマッチングのテストが行われる。これらの学習やテストはすべてマウス操作により行われるので、パソコン操作への習熟度が学習の支障にならないよう配慮されている。Unit 1 から 10 では 10 語ずつ学習し、続く Unit 11 から 15 では、それまでに学習した 100 語がシャッフルされ、今度は 20 語ずつ同じ要領で学習とテストが行われる。最後の Unit 16 は確認テストで、そのチャプターで学習した 100 語から 20 語が出題され、合格すればそのチャプターの学習が完了となる。各ユニットとも、時間制限が設けられており、時間内に学習やテストを完了することが求められる。学習が終了したチャプターは「済」と表示され、途中までのチャプターは学習が完了したユニット数が表示されるので、学習者自身が学習状況を確認することができる。また、「済」のチャプターもオンラインで再度復習すること

が可能となっている。「オンライン単語学習」は情報メディア教育研究センターのホスティングサーバーを利用し、学習履歴はサーバーに記録され、管理者は各学習者の進捗状況を確認することができる。

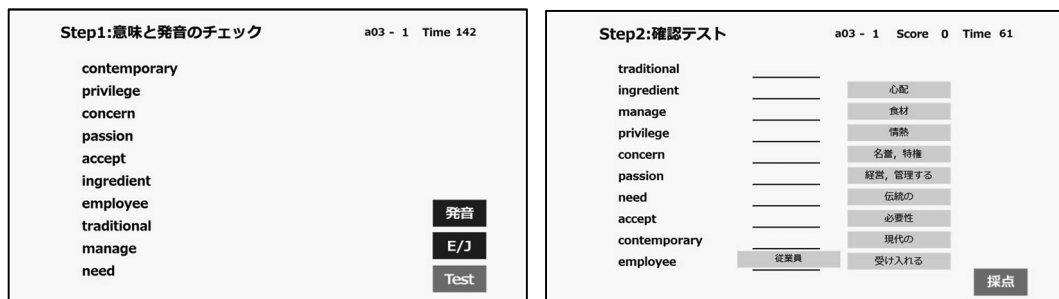


図3 「オンライン単語学習」の学習モード（左）とテストモード（右）

「オンライン単語学習」における「広大スタンダード 6000 語彙リスト」の構成を表 1 に示す。「コミュニケーション基礎 I・II」は計 60 チャプターで構成されており、前期・後期ともに、標準レベル 2,000 語（20 チャプター）、発展レベル 1,000 語（10 チャプター）の学習が課せられている。すなわち 1 週間あたり 200 語（2 チャプター）の学習が想定されている。

表 1 「オンライン単語学習」における「広大スタンダード6000語彙リスト」

科目名	チャプター	内容
コミュニケーション基礎 I (3,000 語)	a01-a20	標準レベル 2,000 語
	b01-b10	発展レベル 1,000 語
コミュニケーション基礎 II (3,000 語)	a21-a40	標準レベル 2,000 語
	b11-b20	発展レベル 1,000 語



図4 サツと英作！

文法知識養成用の WBT 教材システムには、「サツと英作！」が用いられた（図 4）。「サツと英作！」は、安田女子大学（広島市）で開発され、2002 年 10 月より北辰映電株式会社（同）から提供された WBT システム「YASUDA SYSTEM」（松岡，2003）の一部で、簡単な記述により複数の正解に対応した和文英訳問題や英文並べ替え問題を作成することが可能なシステムである。現在のバージョンでは、学習者の画面サイズに応じて表示サイズを変更できる機能が提供されている（西村，2010）。「コミュニケーション基礎Ⅰ・Ⅱ」においては、「広大スタンダード 6000 語彙リスト」の例文から各チャプターより 10 文ずつが選択され、「サツと英作！」の英文並べ替え機能により語順整序問題が提供された。

さらに、単語の発音と例文の音声は英語ネイティブスピーカーによって録音された。標準レベル（a01～a40）の単語については単語の発音、日本語の意味、英文の音声、そして発展レベル（b01～b20）については単語の発音と日本語の意味が収録された。これらを編集し、それぞれ 10 分程度の音声ファイル計 100 本を作成し、専用のウェブサイトで公開した（図 5）。これらのファイルは汎用性のある MP3 形式で、ポッドキャストでも提供されている³⁾ので、学生は冊子体の教科書を使いながら、パソコンやスマートフォンでいつでも音声による学習が可能である。

以上の WBT 教材は、広島大学のオンライン学習管理システム（Learning Management System）である Bb9（Blackboard Learn 9）の授業ページからアクセス可能となっている。



図5 広大スタンダード6000語彙リストの音声ファイル

4. 「広大スタンダード6000語彙リスト」の活用

「広大スタンダード 6000 語彙リスト」とその WBT 教材は、「コミュニケーション基礎Ⅰ・Ⅱ」および同科目と連携している「コミュニケーションⅠB・ⅡB」で活用されている。

4.1 運営体制

英語 8 単位化対象「コミュニケーション基礎Ⅰ・Ⅱ」および「コミュニケーションⅠB・ⅡB」は、すべてセンターの英語教員が担当している。これらの教員は「英語力向上ワーキンググループ」に所属し、定期的な会合やメーリングリストによる情報共有を行っている。

4.2 授業での活用

オンライン授業科目である「コミュニケーション基礎Ⅰ・Ⅱ」においては、学生は各自のペースで「オンライン単語学習」および「サッと英作！」の学習を進めることになる。期末試験を受験するには、表1に示した学習範囲（30チャプター）のうち、3分の2以上のチャプターの学習を期限までに完了しておく必要がある。期末試験は紙媒体で行われ、発音問題や例文の語順整序問題も出題されるため、学生は「オンライン単語学習」で発音をチェックするとともに、図2に示した冊子体教科書で例文を学習しておくことが求められる。

英語8単位化対象クラスの「コミュニケーションIB・IIB」は、「コミュニケーション基礎Ⅰ・Ⅱ」と連動する形で単語学習が課されており、オンライン学習の継続的な取り組みを支援できるよう設計されている。同科目の授業の進め方の例を、表2に示す。

表2 「コミュニケーションIB」授業の進め方（平成29年度前期）

週	確認テスト範囲	教科書
1	IB 授業概要の説明；基礎Ⅰガイダンス；英語実力診断テスト	
2	HTa01-a02, L001-080, G001-042	Unit 1: Finding a Job Unit 2: Dining Out
3	HTa03-a04, L081-160, G043-084	
4	HTa05-a06, L161-240, G085-126	
5	第1回小テスト（第2回～第4回の内容 + HTb01-03）	
6	HTa07-a08, L241-320, G127-168	Unit 3: Business Meeting Unit 4: Travel(1)
7	HTa09-a10, L321-400, G169-210	
8	HTa11-a12, L401-480, G211-253	Unit 5: Entertainment(1)
9	HTa13-a14, L481-560, G253-294	
10	第2回小テスト（第6回～第9回の内容 + HTb04-06）	
11	HTa15-a16, L561-640, G295-336	Unit 6: The Office Unit 7: Shopping Unit 9: Entertainment(2)
12	HTa17-a18, L641-720, G337-378	
13	HTa19-a20, L721-800, G379-421	
14	TOEIC L&R IP テスト	
15	英語実力診断テスト	
期末	第3回小テスト（第11回～第13回の内容 + HTb07-10）	

毎回の授業の冒頭で実施される「確認テスト」の一部として、あらかじめ指定された範囲のチャプターから単語問題が出題される（表2「確認テスト範囲」でHTと記されている箇所。L, Gは、同科目で自学自習用オンライン教材として用いられている「ぎゅっとe」のリスニングとグラマラーの問題番号を指す）。教科書は、先述の『Power-Up Practice for the TOEIC_(R) Test』をベースとした『A Four-Skills Approach to the TOEIC_(R) Test』（榎田・平本・Fraser, 2016）が用いられているため、確認テストの範囲として学習した単語の一部は、その後の授業でも登場することになる。さらに、各セメスターで計3回実施される「小テスト」でも単語の復習が求められており、これらと並行する形で「オンライン単語学習」の学習を進めることにより、「コミュニケーション基礎Ⅰ・Ⅱ」の学習を、分散学習として無理なく行うことが可能となる。

4.3 定期的な点検・改訂

「広大スタンダード 6000 語彙リスト」は Semester ごとに点検・改訂が行われている。訳語、例文、例文の日本語訳の適切さを点検したり、重複する語（単数形と複数形が別々にエンタリーされていたなど）の差し替えなどが、随時行われている。点検だけでも膨大な作業量にのぼるが、「英語力向上ワーキンググループ」メンバーを中心とするセンターの英語教員全員の協力のもとで、現在も改善が進められている。

4.4 「広大スタンダード6000語彙リスト」から「HiroTan」へ

「広大スタンダード 6000 語彙リスト」の愛称として平成 28 年度より「HiroTan」が用いられている。短く親しみやすい名称により、学習用の語彙リストとしての性格がより明確となった。これと並行して、システムとしては古くなった「オンライン単語学習」の新バージョンとなるアプリケーションの開発が進められており、こちらも「HiroTan」という名称で統一されることとなった。

5. 今後の展開

今後の展開としては、先述した定期的な点検では困難であった、重要度の低い単語や、難解過ぎる語の見直しと差し替えを行う必要がある。「広大スタンダード 6000 語彙リスト」開発以降、Browne, Culligan, and Phillips (2013) による「New General Service List (NGSL)」や「New Academic Word List (NAWL)」をはじめとして、日常的・一般的コミュニケーションの場面やアカデミックな場面を想定した語彙リストの最新版が発表されている。また、「コミュニケーション IB・IIB」で用いられている教科書も、当初から大幅に改訂されている。「HiroTan」の新バージョンは、こうした語彙リストや素材を参照しつつ、より学習に適したリストとするための改善が求められる。

注

- 1) この図は、当時広島大学外国語教育研究センター准教授だった前田啓朗氏が作成した。平成 29 年度から、英語 8 単位化対象の一部主専攻プログラムにおいて、「コミュニケーション基礎 I・II」の代わりに、対面授業科目である「コミュニケーション演習 I・II」が開講されている。これに伴い、現在の「コミュニケーション基礎 I・II」受講学生は約 850 名となっている。
- 2) 8 単位化対象クラスの履修生には、同科目で自学自習用オンライン教材として用いられている「ぎゅっと e」の利用料金を含め、各 1,070 円で販売されている。
- 3) ウェブサイトの URL は <<http://pod.flare.hiroshima-u.ac.jp/cms/tango.php>>。

参考文献

- Browne, C., Culligan, B., & Phillips, J. (2013). New General Service List: The most important words for second language learners of English. <<http://www.newgeneralservicelist.org>>.
- Coxhead, A. (2000). A New Academic Word List. *TESOL Quarterly*, 34: 213-238.
- Webb, S. & Nation, P. (2017). *How vocabulary is learned*. Oxford, U.K.: Oxford University Press.

- 相澤一美・石川慎一郎・村田年・磯達夫・上村俊彦・小川貴宏・清水伸一・杉森直樹・羽井左昭彦・望月正道 (2005). 『「大学英語教育学会基本語リスト」に基づく JACET8000 英単語』. 桐原書店.
- 榎田一路・平本哲嗣・Fraser, S. (2008). 『Power-Up Practice for the TOEIC^(R) Test (Revised Edition)』. 英宝社
- 榎田一路・平本哲嗣・Fraser, S. (2016). 『A Four-Skills Approach to the TOEIC(R) Test』. 英宝社.
- 榎田一路・前田啓朗・磯田貴道・田頭憲二(2006). 「広島大学キャンパス・ユビキタス・プロジェクトにかかる英語授業の実践 (その1)」『広島外国語教育研究』 9, 115-125.
- 榎田一路・前田啓朗・磯田貴道・田頭憲二(2007). 「広島大学キャンパス・ユビキタス・プロジェクトにかかる英語授業の実践 (その2)」『広島外国語教育研究』 10, 85-95.
- 榎田一路・前田啓朗・磯田貴道・田頭憲二(2008). 「広島大学キャンパス・ユビキタス・プロジェクトにかかる英語授業の実践 (その3)」『広島外国語教育研究』 11, 83-93.
- 榎田一路・前田啓朗・磯田貴道・田頭憲二(2009). 「広島大学キャンパス・ユビキタス・プロジェクトにかかる英語授業の実践 (その4)」『広島外国語教育研究』 12, 95-104.
- 榎田一路・森田光宏・阪上辰也・鬼田崇作 (2017). 「デジタル機器を利用した広島大学学生の英語学習実態に関する調査」『広島外国語教育研究』 20, 201-214.
- 西村則久 (2010). 「英作文自動添削システム『サッと英作!』の改良」『安田女子大学紀要』 38, 181-186.
- 松岡博信 (2003). 「CALLのためのネットワークサーバ構築と英語教材オーサリングシステムの開発」『コンピュータ & エデュケーション』 14, 27-33.
- 水本篤 (2004). 『【出る順】配列 + 【分野別】配列 TOEIC^(R) TEST3000 語完全マスター』. 語研.

ABSTRACT

Development and Utilization of the Hirodai Standard 6000 Vocabulary List (HiroTan)

Kazumichi ENOKIDA

Mitsuhiro MORITA

Tatsuya SAKAUE

Shusaku KIDA

Institute for Foreign Language Research and Education

Hiroshima University

In this paper, the development of an original EFL vocabulary list for the undergraduate students at Hiroshima University is reported on, along with the way the list has been utilized in the EFL curriculum there. The Hirodai Standard 6000 Vocabulary List (HiroTan), first developed by the Institute for Foreign Language Research and Education (FLaRE) in 2010, has been used in the new online-based compulsory EFL courses, targeting approximately 1,000 first-year students at the university each year. A total of 6,000 English words that are used in daily, business, and academic contexts were selected, and then divided into two levels: 4,000 for the Standard level and 2,000 for the Advanced level. The list was compiled based on several existing vocabulary lists, such as the Academic Word List (Coxhead, 2000), the JACET 8000 Word List (Aizawa et al., 2005), and two TOEIC[®]-related word lists (Mizumoto, 2004; Enokida et al, 2008). All the English instructors at FLaRE worked together to write a sample sentence and its Japanese translation for each of the 6,000 entry words. An original WBT (web-based training) system was used to provide learning materials for the online courses, and the list was also made available in printed form.

In the online courses, students are required to learn 3,000 words in the list per semester (15 weeks) and 6,000 per year using the WBT system. Part of the course content is linked to other compulsory, classroom-based EFL courses, so that students can be assisted to consolidate their vocabulary knowledge on a face-to-face basis. Our future plans include: 1) the replacement of the old, Adobe Flash-based WBT system with the new, HTML5-based one, and 2) a major update of the list to include a range of new important words that appear in the latest vocabulary lists, such as the New General Service List and the New Academic Word List (Browne et al., 2013).